

# わたし きょう きょう あした

168

撮影・千田彩子

5月31日、パレスチナ自治区・ガザへの救援物資を積んだ国際支援船団が、イスラエル軍の急襲を受け、死傷者が出た事件は記憶に新しいだろう。3年近い封鎖と、軍事侵攻によって疲弊したガザ地区で人権擁護活動を続ける、パレスチナ人弁護士が来日した。厳しい現実には絶望することはないのだろうか。



明日は、より良い日になる。  
まわりの人が驚くくらい、  
私は楽観的なのです。  
ラジ・スラーニさん

弁護士、パレスチナ人権センター代表

パレスチナ自治区・ガザ。

天井のない監獄——ガザの人々は自分たちが暮らす地をこのように呼ぶ。地中海に面し、古代から交易の要衝として栄えた地域で、旧約聖書・土師記にもその名が登場する。しかし今の姿は違う。イスラエルとエジプトとの境界沿いに築かれたコンクリート壁や金網などによって遮断された、東西約10km、南北約30kmの地域が現在のガザだ。2007年から始まった、イスラエルの封鎖政策によってガザ地区住民の移動は厳しく制限され、同時に食糧、燃料、医薬品など生活必需物資の搬入も厳しく制限されている。

「想像してみてください。娘ががんになり、化学療法が必要なのに、抗がん剤がガザの病院にはない。事実上、移動が禁じられているため、医療設備の整ったイスラエルの病院へ行って治療を受けさせることもできない。両親は目の前で我が子が死んでゆくのをなす術もなく見ているしかない。彼らはどんな気持ちでいたことでしょうか。これは実際に私の友人の身に起きたことなのです」

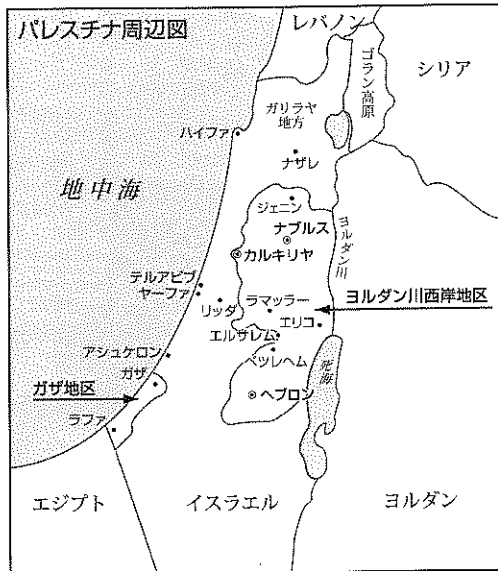
ガザ在住の弁護士、ラジ・スラーニさんが5月末、来日した。国際人権NGOヒューマンライツ・ナウの招聘によるもので、3年にわたり封鎖が続くガザの人権状況についての報告を東京と大阪で行った。

スラーニさんは弁護士として30年近いキャリアを持つ。アメリカのロバート・F・ケネディ人権賞、フランス共和国人権賞、オーストリアのブルーノ・クライスキー(元オーストリア首相・ナチス・ドイツに抵抗した)人権賞などを受賞し、その人権擁護活動は国際的に高く評価されている。

くじ引きに当たるように  
命を奪われる人々。

「私たちが暮らすガザの社会は、窒息状態にあります」  
そして窒息状態にある人々は「くじ引きにでも当たるように」息の根を止められてゆく。

「ある年の夜、家の庭に出ていた私の娘が、空で何か光ったと言いました。私はいつものようにイスラエルの無人機が飛来したのだろうと思っていたの



ガザ地区とヨルダン川西岸地区が、パレスチナ自治区。ガザ地区は、1967年の第3次中東戦争でイスラエル軍に占領され、占領は2005年まで続いた。イスラエル軍の撤退後、パレスチナ自治政府が置かれたが、'06年のパレスチナ評議会選挙で、イスラム原理主義組織ハマスが選挙に参加し、第1党となった。反イスラエルの方針であることから、イスラエルとの関係が悪化し、欧米各国からも反発を受けた。'07年にハマスがガザ地区を実効支配し始めたことで、イスラエルは安全保障を理由にガザ地区を封鎖し、'08年末から'09年1月にかけてイスラエル軍は大規模な攻撃を行った。地図著作：現代企画室「占領ノート」編集部／遠山なぎ／パレスチナ情報センター

ですが、F16戦闘機による空爆だったので。現地調査に行くと、民家が破壊され、おもちゃ箱や本、調理用具などがあたり一面に散乱していました」

子ども9人、女性7人が犠牲になり、137人が重度の障がいを負った。

「またあるとき、パレスチナ人の家族が海岸で毛布を敷いて海を見ていました。その家族に向けて、イスラエルの軍艦が砲弾を放ったのです。父、母、子どもたちが座っていた場所は血の海になっていました。イスラエル軍の説明は、テロリストが海岸にいますと思っただ、事故だった。これでおしまいですが、ガザでは珍しい話ではありません。いつでも、どこでも、そして誰もが命を奪われても不思議ではないのです」

緊張と日常とが背中合わせになっている。その日常さえ吹き飛ばす、イスラエル軍によるガザ地区への軍事侵襲が2008年12月27日から始まった。

大規模爆撃によってガザ地区の社会的な基盤——行政機関、病院、学校、国

連施設、工場、そして数多くの民家が破壊された。年が明けて1月3日には地上部隊が侵襲した。攻撃が終わったのは1月19日だった。

「パレスチナ人1472人が殺され、そのうち87%が民間人でした」

死亡した民間人のうち、約30%が子どもだった。

攻撃したイスラエル側の理屈はこうだ。ガザ地区を実効支配するイスラム原理主義組織ハマスによるロケット攻撃によって、イスラエルの民間人に死傷者が絶えない。自衛のための攻撃だと「そのためならば、ガザの民間人が殺されてもいいのでしょうか。学校や病院が破壊されていいのでしょうか。国際法は、戦時下、占領下にある民間人は保護されなければならないと定めています。攻撃の映像はリアルタイムで世界中に流されました。ガザで何が起きたのか知らなかったとは言わせません。国際社会はイスラエルを非難しましたが、攻撃を止めさせるために有効

## 攻撃の映像は世界に流れたはずですが、しかし、国際社会は行動を起こさずです。



イスラエル軍の空爆によって破壊されるガザの民家。10万人が家屋破壊の影響を受けた。2008年12月。



空爆によって破壊されたモスクと学校。破壊され、使えなくなった学校は8校にのぼる。2009年1月。



攻撃から一年以上経ったいまも、約2万人が仮住まいをしている。写真はガザ市内。写真：パレスチナ人権センター（3枚とも）

な行動を起こしませんでした。私はこれを『沈黙の共謀』と呼びたいのです」

攻撃から1年5カ月経ったいまも、社会的な基盤の復興のめどさえ立たない。イスラエルへの出稼ぎで生計を立てていたガザ地区の住民も多かったが、封鎖によってガザ地区から出られず、収入の道を断たれてしまった。失業率は60%を超え、約170万人の人口のうち90%が貧困線（1日1ドル／世界銀行による国際基準）以下の生活を強いられている。

「いまや私たちに残っているのは人としての尊厳だけだというのに、それさえも剥ぎ取り、物をいに落とそうとしているのでしょうか」

死の匂いが漂っているガザで、スラ

「二さんは、毎日15時間から19時間、10人の若い弁護士と一緒に働く。拘束された作家、芸術家、女性活動家、労働組合の活動家などを弁護し、イスラエルによるパレスチナ人の土地接収、家屋破壊の状況を調査し、損害賠償訴訟を裁判所に起こしている。

「裁判所といっても、イスラエルの軍事裁判所に訴えを起こすのです」

イスラエル軍の戦争犯罪をイスラエル軍の法廷で争うのだから、勝負は最初からついているようなものだ。

「いままで何千という裁判を経験しましたが、勝訴したのは19件だけです。軍事裁判所で正義を勝ち取れるという幻想は抱いていません。しかし、私はここで起きたこと目撃者であらねば

ならないと感じています。そして、起きたことを克明に記録し世界に知らせなければなりません。なぜなら、政治的、思想的な理由で投獄されている人、その家族、ガザの住民に、現状を少しでも良くしようと行動している人間たちがいるのだということを伝えなければならぬからです。彼らに諦めてほしくないのです」

スラーニ自身が語るように、法廷で戦ってもなかなか結果は出ない。さらに言えば、お金にもならない。

「それでも軍の裁判所で弁護士活動を止めないのは、私自身が不正義、不条理を肌で感じたからです」

### 投獄されて決意した、司法制度への挑戦。

ガザの名門の家に生まれたスラーニさんは、ロンドン、ベイルート（レバノン）留学を経て、エジプトのアレキサンドリア大学で法学を修め、77年にガザに戻り、弁護士資格を取得した。

「私の父親は実業家で、比較的裕福な環境で子ども時代を送りました。ところが私が14歳のとき、イスラエル軍によるガザ占領に直面しました」

1967年の第3次中東戦争で、当時エジプトに帰属していたガザ地区はイスラエルによって軍事占領された。

「爆撃があり、殺人があり、破壊がありました。人々は占領に強く抵抗し、私の父も兄弟も叔父も民族的誇りの高い人たちで、やはり強く抵抗していました。そんな状況で私は学校に通っていて、学校には貧しい家の子も、難民の子（1948年のイスラエル建国以

降、故郷を追われた人々が難民化しガザ地区に流入していた）もいました。

そこで私はパレスチナ社会の一部だという自覚が芽生えました。いまでもその自覚を持ち続けています」

弁護士になって2年目の79年、スラーニさんはイスラエル軍当局に逮捕された。非合法組織に所属していることが逮捕容疑だった。

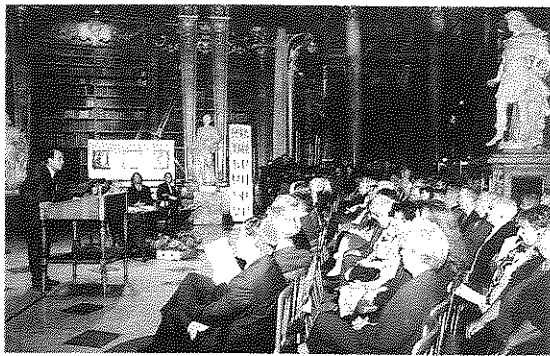
「この容疑だと、普通は4カ月から6カ月の刑期なのですが、私は3年間投獄され、そのうち108日間、ひどい拷問を受けました。家族と面会もできず、弁護士との接見もできません。拷問は信じられないような内容で、軍法によって男女の別なく、12歳以上のパレスチナ人に対して組織的に行われていました。私は弁護士でもあったし、人権団体との関係もあったから完全な形での拷問は受けませんでした。普通のパレスチナ人は私の10倍は苦しんだでしょう。それでも私は1日に50回は死にたいと思っただけです」

獄中で、弁護士としての未熟さを感じた。

「刑務所の中は、ガザ社会の縮図でした。いろいろな社会階層、職業の人が投獄されている。彼らと触れ合う中で、抑圧者にもっと立ち向かっていたらというエネルギーをもらいました。そのためには法を使うことが重要だということを知りました。刑務所の中で国際法、人権法、ジュネーブ条約を一生懸命に勉強しました。ヘブライ語（イスラエルの公用語）とイスラエルの軍法への理解を深めることもできました」

出所後、スラーニさんは法律事務所

攻撃による家屋の破壊状況をアラブ連盟の調査団に説明するスラーニさん（奥）。写真：パレスチナ人権センター（左2枚も）

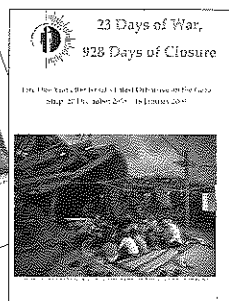
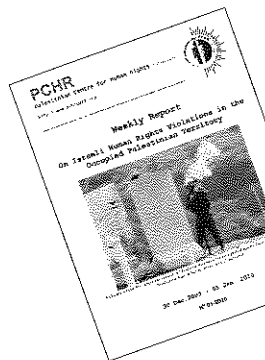


2002年、ブルーノ・クライスキー人権賞（オーストリア）を受賞した。授賞式で記念講演をするスラーニさん（左）。



1996年、フランス共和国人権賞を受賞。シラク大統領（右、当時）とパレスチナ人権センターの人権擁護活動が高く評価された。

私の言葉は、激しい苦痛の代償で得ることができたのだと思います。



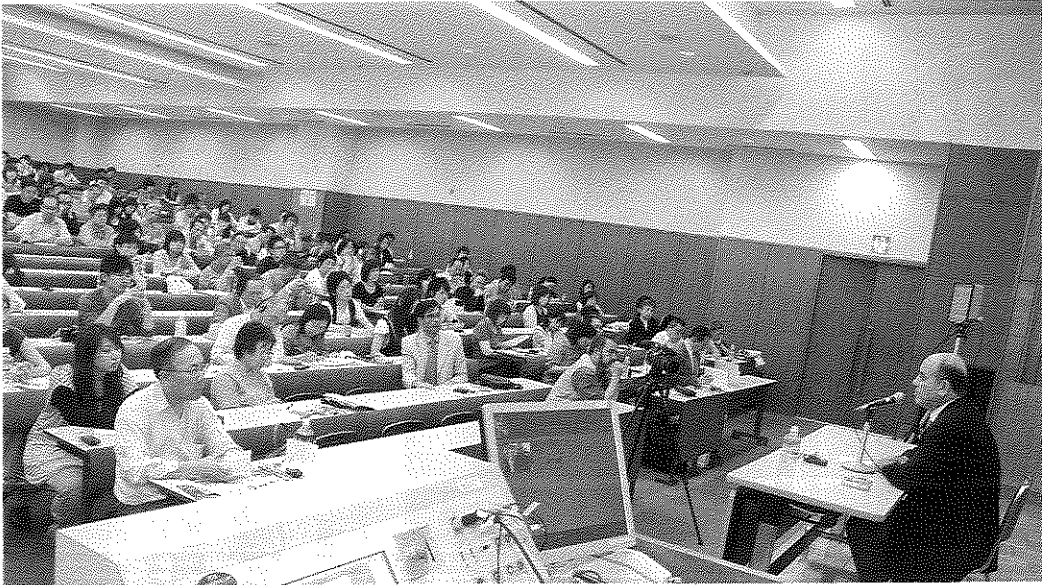
パレスチナ人権センターは、人権状況をさまざまな形で報告している。すべてホームページ（英語）上で閲覧したり、ダウンロードできる。  
<http://www.pohgaza.org/>

# 極度の抑圧は人を、過激主義、原理主義へと駆り立てていきます。

を開き、弁護活動を開始したが、'85年、再び逮捕された。しかし、容疑事実は見つからない。すると、危険人物だという理由で、身柄を拘束できる行政拘束を適用され激しい拷問を受けた。'88年にも行政拘束を受けたが、アメリカ弁護士協会とアムネスティ・インター

ナショナルの働きかけで釈放された。「投獄されたことを後悔していません。人間として特別な経験をしましたし、弁護士として裁判所というイスラエル内部のシステムに挑戦する、現在の活動の原型が形成されたのですから」

かつての軍事裁判ならば、5分で判



立教大学(東京・池袋)で開かれた講演会。スラーニさんは時に、声のトーンを上げて、ガザの住民たちが直面している困難を語った。「彼らが流す血は貴く、私たちの流す血は貴くはないのか?」



「大事なことを聞き忘れていませんか? 家族のことです。妻と16歳の双子の娘と息子がいます。とりわけ妻はずばらしい女性で、23年間、私を支え続けてくれています」

決が出て、即投獄、あるいは処刑ということも珍しくなかった。そんな裁判を勝訴にまで至らなくても、丁寧に事実を積み上げ、国際法を活用し、軍法を逆手にとる弁護活動を通じて変えることができたという自負が、スラーニさんにはある。

「生活基盤を奪われた状況で、人間を孤立に追いやる何が起きるでしょう。極度の困窮は、抑圧者への激しい憎悪を煽り、多くの人々に敵対者の殲滅といった単純で偏狭なメッセージに対する抵抗感を失わせてしまいます。過激主義、原理主義の温床にしかならないのです。私は、ここ東京ではなく、ガザでパレスチナ側のロケット攻撃や自爆攻撃に対しても非難の声を上げています。人権を尊重する態度は恣意的であってはならないのです。どんなに苦しい状況であっても、私たちは道徳的な高みに立ち、単純で偏狭なスローガンに足を拘わればなりません。傷つけられた者は、他者を傷つけることに敏感でありたい。暴力に対して暴力で応えたのでは、相手と同列です」

スラーニさんの足元を支えているのが法であり、スラーニさんがその法を行使することによって同胞の足元を支え続けている。

「パレスチナの人々が私の言葉に耳を傾けてくれるとすれば、プロの法律家の言葉とも、民族主義者としての言葉とも次元の異なつた、皮膚感覚の心の底から湧き出してくる言葉を持っているからかもしれません。それは私がかつて、激しい苦痛という重い代償を払って得たものなのですが」

その言葉はイスラエルのユダヤ人にも届いている。スラーニさんには、ユダヤ人の友人も数多くいる。ガザが封鎖される前は、その友人たちがスラーニさんの家に泊まりにもきていた。

「私たちと同じ倫理観を持ち、理想を抱いているユダヤ人は、数は減っていますが、います。真の平和は政治家の間で結ばれるのではなく、草の根レベルで達成されるべきものだと思います。その意味においては、私は平和から最も遠いところにいます。なぜなら、封鎖によって、理想を分かちあえる友人たちと直接会うことができないうのですから」

「正義」「希望」という言葉に含まれた現実の厳しさ。

スラーニさんは、インタビュー中、何度も「正義」「希望」という言葉を口にした。いまの日本では空疎に響く言葉のひとつかもしれない。

「アメリカのブッシュ前大統領が、諦めるか、立ち向かうか」と二者択一的な発言をしたことがあります。パレスチナ人である私たちには諦めは許されていません。正義の達成を諦めることはできないのです。かつて、誰がベルリンの壁崩壊(89年)を予想できたでしょうか。いま確かにガザ地区にも、ヨルダン川西岸地区にも壁が造られています。しかし、いつかはなくなること。明日は今日より、より良い日になることを、私は信じて疑っていません。私は正義を信じ続けているからこそ語る、私があまりに楽観的だと驚く人もいますけどね」